



2月に行われた「まちづくりセミナー」について

福井県建築士会まちづくり委員長 栗本 慎司

2月21日に、「小浜西組」について学ぶ「まちづくりセミナー」を開催しました。テーマは『重伝建地区のまちづくり「いろは」』、兵庫県から19名、奈良県から16名、福井県から22名の参加がありました。西組のみなさまと小浜市文化課のみなさまの多大なご協力をいただき、充実したセミナーになりました。ほんとうに、ありがとうございました。

今回、行われた「まちづくりセミナー」は、兵庫県建築士会まちづくり委員会が毎年行っている「出張まちづくり委員会」を本年度は、「小浜西組」に於いて行いたいという申し入れからスタートしました。企画を練り上げていくうちに、公益社団法人日本建築士会連合会



小浜西組地区を視察する建築士の方々

まちづくり委員会の「まちづくりセミナー」として、全国の建築士会会員に参加を呼びかける大イベントとして開催することになりました。そして、奈良県橿原市今井町(重伝建地区の大先輩)を有する奈良県建築士会の参加が決まりました。

最初に、兵庫県建築士会まちづくり委員会が「小浜西組」を選んだ理由についてお話しします。兵庫県たつの市は、一度、重伝建指定への取り組みに挫折、それでも「なんとか重伝建指定に向けて進めたい」という、住民の動きがあるそうです。小浜西組の場合、一時期足踏みしたものの、見事、指定に至っています。その「肝」を学ぶため「小浜西組」に白羽の矢を立てたのです。

開催地である福井県建築士会まちづくり委員会にもいくつかの想いがありました。一つ目は、「小浜西組」のまちづくりを知ってもらうこと。とくに、「西組マスタープラン」は重伝建地区選定からはじまるまちづくりの真髄と思われます。二つ目は、福井県に重伝建地区は二つしかありませんが、大野の城下町・三国港の町並みや今庄宿など、重伝建地区

の候補はたくさんあります。少しでも多くのまちで重伝建地区選定に向けた気運をつくりたかったからです。

今回のセミナー、隠れたテーマは以下の二つでした。

1) どうしたら重伝建地区に選定されるか、その「肝」は。

それは、「行政と住民の熱意」と私は受け取りました。パワーのある行政マンが市長としっかり話しをして、

行政内部の人的資源を充実させ、住民としっかり対話することがまず大事。住民は、先進地を視察するなどして、自らの頭で重伝建選定からはじまるまちづくりを考えることが大事。信頼できるリーダーをつくり、「あの人が言うなら」という世界をつくることが不可欠。

2) 「重伝建地区選定からはじまるまちづくりとは」

元市職員の杉本さんから「重伝建選定により、住みやすい環境を創ることが目的。重伝建選定は住みよいまちづくりの手段」と住民に話してきたとお聞きしました。それが「西組マスタープラン」につながり、それに基づくいろいろな事業が今、各委員会で活発に展開されています。「まちなみの保全は生活の保全」と言った先生もいます。西組の取り組みは「重伝建地区選定からはじまるまちづくり」のまさにお手本。今回のセミナーでそれを確信しました。

小浜西組のみなさまの取り組まれているまちづくりは、天下一品です。自信と誇りをもってこのまちづくりを進めていかれることを心からお祈りいたします。



小浜西組地区を視察する建築士の方々



奈良県建築士会のみなさん

防災講演会 行なわれる

平成26年3月11日（火）若狭消防組合主催の防災講演会が若狭消防署で行なわれました。消防署職員はじめ各団体の関係者約80人が参加し、町並み協議会の役員5名も出席しました。

講師は、福井工業高等専門学校環境都市工学科 えもとあけみ 江本晃美先生で「知ること やること 話すこと」と題して講演されました。

防災を考える場合、予防と災害後の対処に分けて考えることが重要で、インフルエンザに例えて考えると理解しやすいと説明がありました。

起きる前（予防）は何をすべきか？ 発災後（起こってしまったら）どう対処すればよいのか？ 予防策の1つとして非常持ち出し袋を用意すること。家庭でオンリーワンの袋を用意すること。一人一人、大切な物がちがってくるので、その人にとって大切な物を優先的に用意しておくこと。子供であればぬいぐるみなど又、好きな食べ物を用意しておくことも大事ですと話されました。

市町が作成した防災マップは、家族みんなで避難経路、避難場所を確認、知っておくこと。そして隣の市町の防災マップにも目を通しておくことが大切だとも言われました。

クイズ形式によるグループワークも行なわれ、災害時にどう行動したらよいかを話し合ったりしました。

聴講したことにより各家庭で今やることは、家具を固定させること、非常用持ち出し袋を用意すること、水やカンパン等を用意することなど災害に対する心構えを再認識しました。



小浜西組町並み協議会からの

●お知らせ●

■ 町並み保存資料館の4月からの開館時間

平成26年4月1日～11月30日 午前9時～午後5時（火曜日休館）

■ 町並み保存資料館企画委員会より

「5月人形と鯉のぼり展」を行ないます。

平成26年4月25日（金）～5月17日（土）



投稿コーナー



町並み月報に地域住民が自由に投稿できるコーナーです。協議会までどしどしお寄せください。(町並み保存資料館ポストへ投函ください。)

ふたつの叫び

小堂 文子 (76歳・鹿島区)

“姉さん！逝かないで、死ぬのはやめて”と涙をためての私の悲痛な叫びもむなしく、たった一人の姉は88才の生涯を小浜市一番町でとじた。わずか2週間の入院生活だった。人の他界ほど辛いものはないが、血を分けた肉親の姉であってみれば堪え難い。私は二人だけの姉妹だけに尚更である。昨年の

暮も押し迫った忙しい中での永遠の旅路であった。

日頃は明るく屈託のない姉であったが、時として辛らつなことも平気で言うのには参ってしまったこともあった。姉が家を出て嫁ぎ、妹の私が家を継ぐ結果となってしまい、私が嫁ぐべきだったと悩んだことも幾度か過去にはあった。

亡くなる少し前の先頃、羽賀寺にお参りし、お坊さんと話をして、小浜公園で撮ったツーショットが真新しい。それでも晩年になると人恋しさが、訪れると、こよなく喜んでくれた。「よく来てくれた。来てほしかった。何にも持って来なくてよい。来てくれるだけで嬉しい」と言ってくれた。炊事場でごそごそしていたり、好きな編み物に夢中になっていたたり、テレビを見ながら居眠ったり毎日の毎日であった。玄関を開けて声かけしても反応はなく背中に手をかけるとやっとわかってもらえる時が多々あった。しかしもう姿も声も影もない。いる所にいないと確認できると、寂しいどころではなく悲しみがこみあげてきて自然と涙にくれる。

あの太い体で長寿を全うでき、平均寿命をふたつも上回った。姉は長寿できたのだから、細身の方はもっと生きられると自信を深めたことだろう。長く生きられたのは、家庭の平和が第一だろうと思う。4人の娘に恵まれ長女は才媛で働き手の婿をもらい、家業の印刷業を拡大させ、穏やかに姉に接してくれたからだと感謝している。四女も近くにいて、時々見に来てくれて親子の絆を深め楽しい毎日を過ごしてくれた賜物であろうと思う。核家族が進む中で、姉の家は楽しい一家だった。これらが長生きの基となったものと思う。人と人が睦み合うことが長生きの基礎となるように思えてならない。

“若者よ！小浜を出ないであくれ、この町にとどまってあくれ”が私の切なる叫びであり、願いです。みんなの願いも叫びも同じものと思います。人が減っては市の発展など思いもよらない。姉の逝去に際し、人の全容の一端がわかったような気がしてならない。

地域の発展をお祈りしております。

